

五感に働きかける体験型美術鑑賞の試み ー鹿沼市立川上澄生美術館での実践を通してー

齋 藤 千 明¹

1, はじめに

2018年7月7日から9月17日、栃木県鹿沼市立川上澄生美術館展示ホールにおいて筆者は「版表現と身体性」をテーマに個展を開催した。本稿は、個展会期中に試みた体験型美術鑑賞プログラムの実践報告である。

この展覧会では、日本の伝統木版技法を用いて制作した版画作品シリーズ「青黛^{せいだい}の泡沫^{うたかた}」7点と展示ホールの壁三面に構成された同シリーズのインスタレーション作品を発表した。それらは具体的なモチーフを描いたものではなく、深い青色を用いて抽象的に表現された作品である。展示会場で配布する作品リストやキャプションの記載は題名と制作素材・技法に関する情報のみにとどめ個々の作品解説を省略することで鑑賞者が先入観に囚われないよう配慮した。

鑑賞の端緒として作品制作で使用した版木を床に展示し、彫刻刀で彫られた痕跡の触感を自らの皮膚でじかに確かめてから直接的版表現であるフロタージュ技法を体験させるという（造形活動）体験型美術鑑賞を試みた。

美術館の展示空間で作品と対峙する際に、五感を働かせた主体的な鑑賞を促すためにどのような具体的アプローチが有効であるか、まずは「版」

¹ 白鷗大学教育学部
e-mail : saitochiaki@fc.hakuoh.ac.jp

を媒介に触感から視覚を刺激して美術鑑賞に繋げる方法について検証していく。

また、2018年度白鷗大学教育科学研究所の助成により進めているデジタルファブリケーションを活用した造形活動および教材研究において、子ども達のデジタルコンテンツを活用した造形と版表現への応用についても課題テーマとして本研究を進めていく。

2， 展覧会概要

2－1 作品制作工程

版木は、1枚600×900mmサイズ、厚さ12mmの木版画用シナベニヤ合板を用意し、作品には合計7枚を使用した。左右それぞれ版木を縦長で2枚、中央は横長で3枚つないで縦1800×横2100mmサイズの画面とし、展覧会全体のイメージを直接彫り込んでいった。通常、木版で使用するシナベニヤは芯が5層になっている6mm厚の板を使用することが多く、両面使用する場合でも9mm程度の厚さで十分彫りに耐えるが、この作品では美術館で展示し、版木の上に大人が体重をかけて乗ることを想定していたので通常使用する厚さの2倍、12mmの版木を使用した。同じように彫刻刀での彫り方においても、版木刀を形の外側に向け、彫り跡が台形になるよう斜めに入れ、上から圧がかけられてもエッジが欠けにくいように注意を払った。(図－1)

展示作品は7枚の版木の組み合わせを変えて摺り重ね、同じ版木を使用してもそれぞれ異なる画面構成で仕上げられている。また、壁に直接木版画を貼り付けたインスタレーションの作品は、摺り上げた和紙を必要な形にカットし貼り合わせながら画面を拡大し、パーツに分けて制作を進めた。このシリーズの作品名にある「青^{せいたい}黛」とは、日本の伝統色で藍が還元発酵して染色可能な状態になると表面に泡が立ち始める。この「藍の花」と呼ばれる泡を集めて精製した染料が青黛である。作品に使用した色は青系顔料と墨を主にしているので摺りを終えた版木の表面は全体が黒に近い

藍色に染まっており、彫刻刀で施した細かな彫り跡は見えにくい状態になっている。表面を軽く水洗いして乾燥させ、絵柄を繋げて美術館床に展示し、鑑賞者は、手で触れるだけでなく、靴を脱げば版木に上がることができる。

版木は、美術館展示ホールの中央に壁展示の作品を囲んで1800×2100mmの形で設置した。(図-2)

個展展示詳細は以下のとおりである。

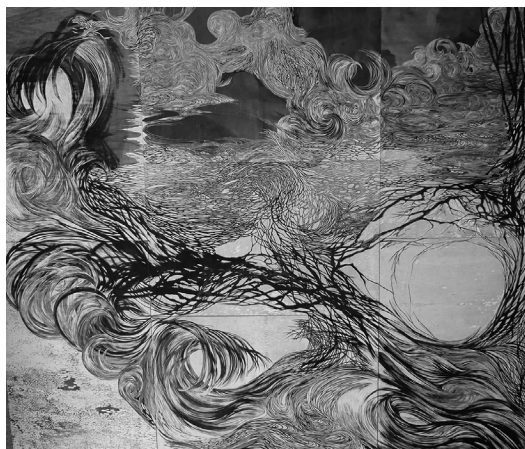


図-1 版木7枚組彫り跡



図-2 美術館展示ホール中央—版木設置風景

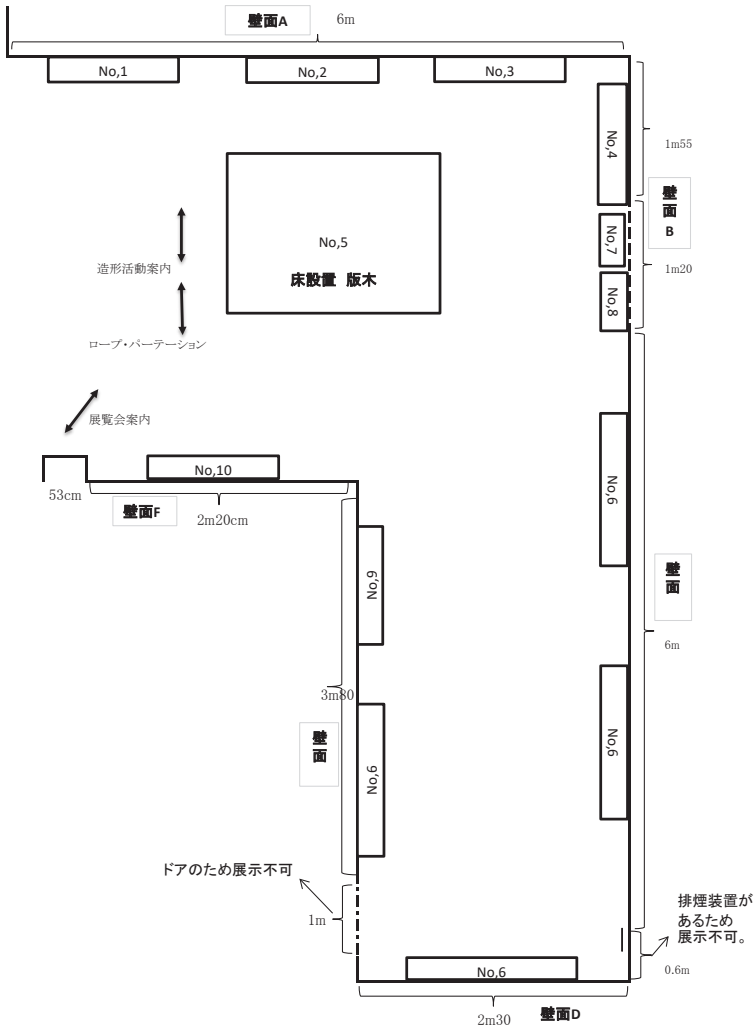
2-2 出品作品リスト

No,	作品タイトル	制作年	素材・技法	サイズ (mm) H×W×D
1	「青黛の泡沫」より作品1	2018	ハーネミューレ紙に水性 木版, 顔料, モノタイプ	1040×720mm
2	「青黛の泡沫」より作品2	2018	ハーネミューレ紙に水性 木版, 顔料, モノタイプ	1040×720mm
3	「青黛の泡沫」より作品3	2018	ハーネミューレ紙に水性 木版, 顔料, モノタイプ	1040×720mm
4	「青黛の泡沫」より作品4	2018	ハーネミューレ紙に水性 木版, 顔料, モノタイプ	720×1040mm
5	青黛の泡沫ー場ー	2018	版木 (900×600×12mm) ベニヤ合板 7 枚組作品	1800×2100mm
6	青黛の泡沫ー界ー	2018	和紙に水性木版 インスタレーション作品	サイズ可変
7	「青黛の泡沫」より5-1	2018	ハーネミューレに水性木 版, 顔料, モノタイプ	H 727×W 514 ×D 25mm
8	「青黛の泡沫」より5-2	2018	ハーネミューレに水性木 版, 顔料, モノタイプ	H 445×W 334 ×D 25mm
9	「青黛の泡沫」より6-1	2018	和紙に水性木版, 顔料, コラージュ, モノタイプ	H 541×W 727 ×D 25mm
10	空蟬のかたち-2013-1	2013	和紙に水性木版, 紙衣 コラージュ, モノタイプ	1300×900mm

2-3 展示構成

会場見取り図（展示作品レイアウト）

1階展示ホール見取り図



2-4 展示風景画像

①壁面A「青黛の泡沫」より作品1～3 額装壁展示



作品No.1



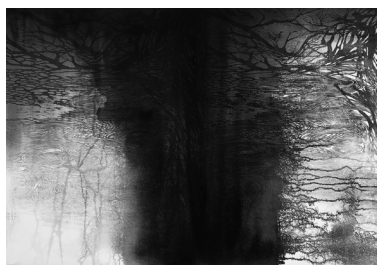
作品No.2



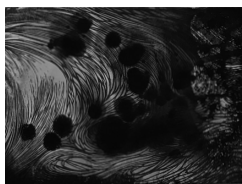
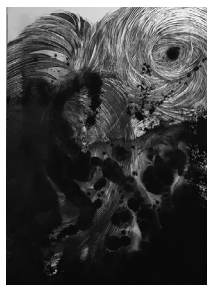
作品No.3

壁面A, B及び展示ホール床設置の版木(図-2参照)

②壁面B「青黛の泡沫」より作品4, 5-1, 5-2



作品No.4



作品No.5-1, 5-2

③壁面C, D, F 青黛の泡沫－界－ 作品No,6 インスタレーション作品



図－3 壁面C, D,



図－4 壁面D, E

④作品No,10 空蟬のかたち－2013－1, 壁面展示風景ホール正面



図－5 作品No,10, 展示ホール正面

3, 体験型美術鑑賞プログラム

3－1 版木を用いた造形活動

版木の表面に触れ、板に彫られている形が展示作品の一部になっていることに気付くことが出来れば、その部分の複写物が鑑賞する際のガイドピースになりうるのではないかと考え、鑑賞者自身がそれを作製する企画を立案した。実際の技法として児童から大人まで同様に楽しめるフロッタージュ（こすりだし）を提案した。

フロッタージュ（こすりだし）とは、凹凸のあるもの、木や石などの上に紙や布をあて、上から鉛筆やクレヨン、コンテ、油墨などを用いてこすることで下の凹凸の形象を表わす技法で、造形遊び、図画工作でも偶然性

を生かして表現するモダンテクニックの一つとして使われる。またこの技法は、拓、拓摺りとも言い、古くから石碑に刻まれた經典や文様を写し取る複写方法として使用されている。版を用いた表現方法のほとんどが絵具やインクを版に盛り、それを紙や布に摺り取るのに対しフロッタージュ技法では版に密着させた紙へ直接顔料をつけ絵柄を浮き出させるため、写されたものが逆版にならずそのまま摺り取られる特徴がある。

美術館展示室内で常時自由に参加出来るようにするには、使用する材料、画材の管理が簡単で展示物を汚さないものであること、年齢、経験の別なく扱いやすいことが条件となり、このことを考慮してもフロッタージュ技法が最適であると考えた。

3-2 造形活動の実践計画と準備

①材料の選定

フロッタージュ技法を施す用紙は、薄い用紙を使用すると版木に密着し微細な凹凸も拾うことが出来るが、デリケートな作業となり技術を要する。美術館での造形活動は、特定の日時に講師指導のもとワークショップとして行うのではなく、展覧会開催中いつでも自由に参加できるようにするため幅広い年齢層の参加者を想定して造形材料を選定しなければならない。よって、幼児の殴り書きのような動作、体重をかけた描画作業で生じる摩擦に耐えうる強度を持った紙が必要となる。また、こすりだして紙に表出させた形状と作品を比較しながら鑑賞することを造形活動の目的としているので木版技法で摺られた形状と比較しやすいことなどが望まれる。

描画材料は、展示作品保護も考慮し、湿性の材料は避け乾性のものから選択する必要がある。以上の条件と造形遊び、図画工作で標準的に使用される材料の中から考え、紙は、PCプリンター用紙（普通紙）、画用紙、ケント紙、トレーシングペーパー、版画用和紙の5種類、描画材料も、鉛筆、色鉛筆、全芯色鉛筆、パステル、乾拓用墨の5種類を使用材料の候補とし、それぞれの組み合わせでフロッタージュを試行した。

試作の結果、5種類の紙と描画材はどれもある程度フロッタージュ技法を施すことが可能ではあるがプリンター用紙は細密な彫り跡まで再現出来る一方鉛筆類でのこすりだしには強度が足りず、画用紙とケント紙は紙が厚いため浅く彫られた版木の形は写し取れなかった。

版画用和紙は、楮の他、パルプ、合成繊維が配合された機械漉きの和紙で、洋紙に比べ長い繊維が漉き込まれているので強度があり、表面ににじみ止め加工が施されているため描画材での摩擦による紙表面の毛羽立ちも比較のおさえられており、使用素材として有効と考えた。

トレーシングペーパーは、PCプリンター用紙と同様、強度が足りないと感じられたが写し取った面を裏返して見ると版木に絵具を塗布し和紙に摺り取った木版画の反転した形を見ることが出来る。展示作品と見比べる際に反転して転写される版表現の特徴が非常に分かりやすく、版画制作に於いては下書きを版木に写す際に用いられることからより作業手順の理解にも繋がる効果があり、強度面を補うために厚手のトレーシングペーパーを選択し使用することを検討した。

描画材の選択では、鉛筆類は芯が硬いと芯先で紙を引っかけて破ける原因となるので鉛筆ではB以上6B程度のもの、色鉛筆でも柔らかい全芯色鉛筆を選択した。クレヨンは、全芯色鉛筆に近いパラフィン、蠟の成分が多めの堅いものが細かい彫りを写しとりやすい。乾拓用墨は、拓摺り専用の画材であるので釣鐘型で持ちやすく、凹凸をきれいに写し取ることができるが、一般的に馴染が無いため説明がないと扱い方に戸惑うことが予測される。

以上のことから描画材料は、全芯色鉛筆、硬質クレヨン、軟質色鉛筆及び鉛筆とし、用紙は、版画用和紙と厚手のトレーシングペーパーを使用することとした。用紙の大きさは、児童が前腕で左右にストロークして描画した際に画面から描画材がはみ出しにくい大きさとして数サイズの用紙で検証し、A3(297×420mm)が適当であると判断した。

②実践計画

フロッターージュを行うための材料は、版画用和紙とトレーシングペーパーを1枚ずつ2枚1組にし、描画材はペンケースに鉛筆、色鉛筆、全芯色鉛筆、硬質クレヨンを数本ずつ6色から8色程度バランス良く小分けにして10セット用意した。他にフロッターージュを行う方法の説明と注意事項を書いた用紙を1セットとして参加希望者に配布することとした。方法、材料説明と注意事項は、次の内容である。

- 1, やり方ー白い和紙と半透明の紙2枚どちらも自由にお使い下さい。

版木の上に紙を置き、色鉛筆やクレヨンで紙の上に自由に色を塗ります。

版木の場所を変えたり、色を重ねたり、自由に楽しんでください。

- 2, 注意ー版木の上に乗る時は、靴を脱いでください。

版木に直接色を塗ったり絵を描いたりしないようにお願いします。

持参した鉛筆、ボールペンや先の尖った道具類は使用しないで下さい。

すべりますので飛び跳ねて遊ばないよう気をつけてください。

- 3, 制作した作品は、お持ち帰り頂けます。持ち帰り用の簡易包装が必要な方は美術館受付でお渡しします。また、作家が展覧会資料として皆様の作品をファイル保存したいと思います。持ち帰りを希望なさらない方、作家保存で構わないという方は、美術館受付に提出願います。

以上、ご協力いただき、ゆっくり楽しんで下さい。

参加者の制限は、小学生以上とし、幼児の場合は、保護者同伴で参加可能とした。この造形活動の案内は、美術館展示ホール正面に配置する展示

案内ポスターと共に表示。併せて美術館入館受付にて口頭で案内してもらう事とした。鹿沼市内の小中学生は夏休みの期間中入館料が無料となり、美術鑑賞に訪れる児童、同伴の保護者の来館が増えるため、口頭での案内が参加を促しやすい。

参加費をどうするかということで美術館担当学芸員にも意見を求め、無料とした場合、一人で何枚も使用する方がいた場合の対処に困るなどの意見もあり、用紙と描画材料費で1回100円を徴収することとした。

3-3 造形活動を伴う作品鑑賞の実践

展覧会初日2018年7月7日午前9時に開館後、先ずは作家（筆者）がフロッタージュ技法の説明と実演を行い美術館職員、学芸員が試作した。目的は、用意した数種類の描画材料と用紙の特性を理解することと、参加者から材料、フロッタージュ技法等に関する質問への対処方法の検討である。

また、鑑賞者の動線を考慮するため展示ホールを数名で回り、床に設置した版木の位置を調整して準備を整えた。しかし展覧会初日から2日が経ち、展示に関して問題が発生した。学芸員から、床に設置した版木の上を靴のまま通り抜ける、作品を下がって鑑賞しようとした際に版木を踏んでしまうといった事例報告があり、つまずきの原因にもなることから設置した版木の周囲に部分的なロープ・パーテーションを設置することとなった。

さらに分かりやすくするため造形活動の案内をボードに記し、パーテーション横に新たな案内表示を加えた。このボード設置は、版木でつまずくトラブル回避につながり、以後会期終了まで問題なく進行することができた。

(図-6、図-7)



図-6 展示ホール正面案内板

展覧会オープンより10日間が経ち、美術館職員の報告では来館者の多くが版木に興味を持ち、触っているとのことであるが、フロッタージュを試す人はまだいなかった。

特別な参加型の展示を除いて美術館での作品鑑賞は、作品とある程度の距離を取って静かに観ることがマナーとされ、場所によっては少しの会話でも注意を受けることも少なくない。ましてや他に鑑賞者が数人程度もしくは自分だけといったような静かな空間で、独り床に膝をつき音を立てなが

らフロッタージュを試みるのはさらなる勇気が必要であろう。しかし他者が行っているところを目にすれば同調効果で参加しやすくなると考え、美術館に滞在中は展示ホールでの作品説明に加えフロッタージュの実演も行った。この試みにより少しずつ参加者がみられるようになった。さらに夏休みに入り児童の入館者が増えると共に参加者も増え、延べ80名が参加し52枚の作品提出があった。

提出されたフロッタージュ作品を観ると描画材を変えず版木の一部分を写すだけの作業で終えた作品はほとんど無く、年齢の別なく多くの作品が色と版を重ねて丁寧に制作されている。また、筆者が美術館滞在中、A3サイズの用紙2枚にフロッタージュを行っている時間を計ったところ、参

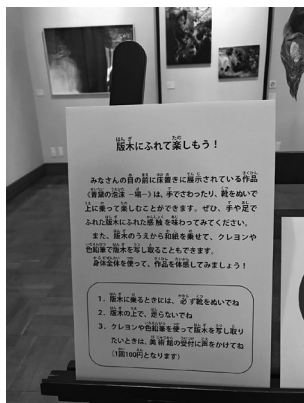


図-7 版木フロッタージュの案内板



図-8



図-9

加者の多くは20分以上、なかには1時間近くかけて2枚仕上げたケースもあり、予想より長い時間版に関わっていた。(図-8、図-9)

配布した和紙の片側に題名、サイン、制作日、感想等自由備考欄を設けたことで単純に表面の形を写す作業を行うイメージより版木を用いて作品を作る方向に意識を誘導したのかとも思えるが、時間をかけていた参加者の制作導入には、大きく分けると二つの方向性が見られた。

一つは、はじめに展示作品を観て版木の彫り跡から写し出される模様を予測し、その形から連想する物や風景など具体的な題材をある程度設定した上で制作を始める。自分のイメージした完成形に向けて、重ねる色と写し取っていく形を版木の中を探しながら具象的に表現していく制作方法。(図-10) もう一つは、特に何を描くかは決めず、フロッタージュという技法を先ず試して偶然紙に転写された形や色の表情から想像を膨らませて版を重ねて行き、現出した色や形を用いて心地よいバランスを取りつつ自分のイメージを具体化していく方法である。

(図-11)

自由な描画を加えて具象的に形を描くことも出来るが、どちらのアプローチ方法でも版を用いて絵画的に表わすことを主としており、床に設置された版木の上に乗って地と図の区別なく多方向から版木と向かう制作方法は抽象表現であり、作品を鑑賞する手がかりとして大いに有効である。(図-8、図-9)



図-10 具象表現

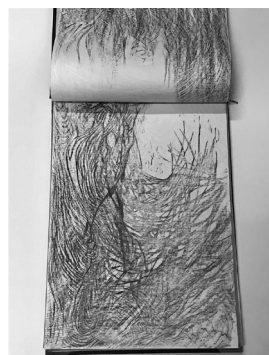


図-11 抽象表現



図-12 フロッタージュ作品ファイル

3-4 ギャラリー・トーク

2018年8月26日午後14時から美術館企画のイベントとして作家によるギャラリー・トークが開催された。(図-13) オープン参加のため正確な人数は把握していないが約20名から30名程の聴衆であったと思う。

通常、美術館に滞在している間は、作家から声がけして表現技法、制作方法などに関する質問があれば説明したり、鑑賞者の感じた事などを聞かせてもらい、作家より発信するだけではない対話型の美術鑑賞を心がけている。

しかしながら、イベントとして催されるギャラリー・トークにおいては参加人数が多くなるほど、作品を囲んで作家や学芸員が作品解説をし、それを参加者が聞くという受動的な導入となりがちである。これまでの経験では、特に作家が自らの作品について制作意図や何を表現したかといった具体的な解説をした場合、鑑賞者が作家の制作意図と違う見え方や感じ方を得ていたとしても、それを自由に語ることは容易ではなく、結果、作品解説のみでギャラリー・トークが終了するケースが少なくない。よって、今回はなるべく作品の制作意図や作品のモチーフなど鑑賞者がイメージを固定してしまうような具体的な解説はせず、床に設置されている版木を囲んで日本の伝統的な水性木版画の表現技法と特徴的な材料を紹介し、フロタージュを実演しながら作品にどのように使用されているかという制作方法の解説から始めた。展示されている木版画の表層を観察した後、視点を落として版木の中に同じ形を探してもらう。この視点の動きを繰り返すことで作品の一部から全体に意識が広がり、インスタレーション作品では空間を感じながら作品を観られるようになり得ると考える。

また、展示ホール壁面に直接和紙を貼り付けて構成されたインスタレーションでは、鹿沼産のこんにゃく粉から作った糊を使用していたこともあり、地元産の素材の特徴なども含めた生活に身近な話題と関連づけることで参加者との会話も活発になり、ギャラリー・トーク終了後に版木に触れてフロタージュの作製や、個別に質問をする参加者もあり、より活発な対話ができた。



図-13 ギャラリー・トーク風景

4, 今後の課題

展覧会期間中に作品展示空間で常時造形活動を行うことは今回が初めての試みであったため、開始直後は参加者への案内、会場レイアウト、活動の援助などで準備不足の面もあったが、美術館職員、学芸員の協力もあり美術館で行う造形活動のプログラムとして版表現を取り入れる有意性を実証できた。作品で使用した版木に自由に触れながら作品を観る行為は、特に児童の美術鑑賞教育において自分で考え体感した感覚を言語活動につなげて表わす行為に繋がり、より総合的な表現活動を行う事ができる。

2019年7月に烏山聖マリア幼稚園にて同作品の展示および版木を用いたフロッタージュ技法による版表現ワークショップを行う予定である。川上澄生美術館では幅広い年代の参加者を対象としたプログラムであったが、今回は5歳児を中心とした造形活動のため、幼児に適切なプログラムの再検討が必要となる。特にフロッタージュで用いる描画材料は、幼児が安全に扱うことができる素材の改良が今後の課題であることが美術館での活動を通して見えた。

今回はフロッタージュ描画を作製したわけだが、こういったアナログ素材をデジタル機器を用いて展開させる構想も準備中である。

たとえば作製したフロッタージュ作品をデジタルデータ化し、ペイント

ソフト上にて自由に加工したのちレーザー加工機で多種多様な支持体に出力するといった方法である。この場合、アナログ（版木→フロッタージュ）→デジタル（ペイントソフト→レーザープリンター）→アナログ（アクリル板、ゴム、木材その他の支持体に描出）となり、デジタルコンテンツ化することにより、異なるアナログ作品として新たに再展開することが可能となる。

デジタル上の描画は紙に直接描く絵画とは違い、何度でも加筆修正加工が容易で多様なコンテンツが用意されていることから子どもの創作活動のなかでは既に身近なものとなっている。今後は、ICT教育の推進によりさらに子ども達が活動する図画工作の実習室にも新たなデジタル加工機の導入が進むことが予測される。デジタルデータをどのような加工機材と接続し、どのように変換させていくか、美術館で行った造形活動、提出された作品資料を基に、子ども達の造形と版表現におけるデジタルコンテンツ活用の検討も今後の課題と言えよう。

参考文献

- 室伏哲朗（1985）版画事典 東京書籍
Neil Gershenfeld（2012）Feb オーム社
吉岡幸雄（2005）日本の色辞典 紫紅社